

惑星的思考と伝統の知恵

—小田まゆみさんインタビュー—

小田まゆみ 日本トランスパーソナル心理学 / 精神医学会顧問
村川 治彦 関西大学人間健康学部*Planetary thinking and wisdom of the tradition:
an interview with Mayumi Oda
ODA Mayumi
MURAKAWA Haruhiko

小田 まゆみ

(アーティスト・カリフォルニア統合学大学院名誉博士・本学会顧問)

東京芸術大学卒業後ニューヨークのプラット版画工房で学び、数多くの国際ビエンナーレに出品。女神をモチーフに女性と自然とのつながりをテーマにした作品を数多く世に出し「日本のマチス」として多くの人に知られており、その作品はニューヨーク近代美術館ほか国内外の多くの美術館でコレクションされている。1992年 日本政府のプルトニウム輸送に反対し、団体「プルトニウムのない未来 (Plutonium Free Future)」をカリフォルニアと東京に設立。新エネルギー推進運動を世界に訴え、核兵器を非合法化する運動の国際法廷 (在ハーグ) の運営委員を務める。現在はハワイ島の広大な有機農場「ジンジャーヒル・ファーム」で、いのちを大切にしたい生き方を若い人たちに教え、創造的な生活を送っている。東北関東大震災後、若い人々の里帰りを助ける「女神の里」のプロジェクトを設立。著書『ガイアの園』、『女神たち』(現代思潮新社) 他。2012年5月14日から2013年1月13日までホノルル美術館にて「新生日本への祈り」をテーマにした個展を開催。ホームページ：<http://gingerhillfarm.com/>

ビジョンとしての女神

村川：小田さんは1970年代からアメリカで女神を描いてこられ、西欧の「女性のスピリチュアリティ運動」(Women's Spirituality) に大きな影響を与えてこられました。小田さんがそうした運動のなかで果たしてこられた役割について、まずお話しいただけますか。

小田：私が何か役割を果たしたということではないのですが、画家として「ビジョン」を提供してきたと思います。女性運動の中で何もビジョンがなかったところに、ビジョンを視覚化するというのが私の役割だったような気がします。最初に女神を描きだしたきっかけは、ベトナム

戦争でした。私は、1960年代に最初の子どもを産みました。ちょうどベトナム戦争の最中で、アメリカで男の子を産むということに非常に恐怖がありました。とても暗い気持ちで、この子はどうなるのだろうと思いました。希望がものすごく必要で、本当に祈り、助けてくれという感じでした。でも、助けてくれというのは一体何かというと、神様を呼ぶのではなく、自分の中の強い力を呼ぶという、それだったと思うのです。私たちが助けてほしいというときには、普通「神様、自分は弱いから」と自分を弱いと思うのですが、本当は自分の中の強さを呼んでいるような気がします。なぜなら、実際に何かがやってくれるということではないのですから。

自分のからだから女として、子どもを産む強いからだになっていく中で、女性として子どもを産む力というのを実感しました。それを、女神という形にして表現してみたら、社会の無意識

* E-mail : murakawa@kansai-u.ac.jp

の表現として女性たちに受け入れられた、ということだと思います。当時は社会がどん詰まりになる寸前でしたから、その中で女性性に戻るという、それこそ3.11の後にしていかなければならない仕事を60年代からさせてもらってました。それが、私の生まれた意味合いだったのではないかとも思います。

村川：小田さんが女神を描きだしたとき、自分の内にあるものを出していかれたということですが、どのようなものが自分の内にあると気づかれたのですか。

小田：女神と言うのは、女性のもつ「育む力」、「愛する力」、そして「ずっと命が続いていくと願う力」を表現した形です。一言でいうと、自然とのつながり、ワンネス（Oneness）です。私たち日本の文化、特に江戸時代の文化は、そうしたワンネス（Oneness）といったものをずっともってきたわけです。それをただ、外国の人にわかるように作り変えたようなところがあると思います。必ずしも新しいことをしたわけではないのです。アメリカではやたらに新しく思われましたが、日本の文化がずっと育んできたものをアメリカの人が分かるような「女神」という形で出したのではないかと思います。

村川：そうした江戸時代の文化で育まれてきたものを、小田さんは絵を描き出す頃からご自分の中で気づいていらっしたのですか。

小田：好きでしたね。江戸の文化だけでなく、仏教の文化などもそうです。日本の文化というものに対して、自分はそれに反対して出て行ったにもかかわらず、ものすごく恋しいような惹かれるものがありました。今考えてみたら、日本人の自然とのつながりというのは非常に強

くて、自然と本当に一つだと思っている人たちが描くものというのは違っていたのだと思います。そういうことが、西洋では絵の世界にも見当たらなかった中で、江戸の文化からビジョンをもらいましたし、外国にいるから余計に新鮮に思えたのだと思います。

内なるポジティブな力に気づく

村川：小田さんにとって、1970年代に始まった女性のスピリチュアリティ運動というのは、どのようなものだったのでしょうか。

小田：時代によって変化して、皆大人になっていくのですが、最初は、「ウーマン・リブ」¹⁾でした。男に反対するところから始まったのですが、しだいに自分の内なる女性性を認め、もっと自分自身に対してポジティブになろうとするようになったと思います。私の中では、「ウーマン・リブ」は飲み込めませんでした。特に父親がそうだったのですが、私は非常に仏教的な親に育てられました。「お前は仏陀だ」といって育ててくれたので、ある意味で、自分というものはポジティブな存在だということが、自分の中にはっきりあったのだと思います。しかし、アメリカの女の人には、それが無い人がとても多かったのです。それを高めてあげることができたのだらうと思います。私が出した女性のイメージによって、「あ、わかった」というきっかけを与えたということです。絵というのは、直接的に深層の中に入りますよね。だから、そういうことができたのではないかと思います。

村川：特にアメリカや西洋の女性たちが、自分たちの内にあるけれども、ずっと気づかなかったものを、小田さんの絵がダイレクトに光をあて、そこに気づきのお手伝いが出来たとい

うことですね。当時のアメリカの女性は、男性中心社会の抑圧に対して反対することを中心にしていたと思いますが、小田さんはそうした方向ではなかったのですね。

小田：反対するよりも、文化の中で女性をポジティブなものにしたり、女性性というものを表現していこうと思ったのです。そのために、仏様を性転換して女にするとか、そういうことから表していったのです。仏様自体の、命を大切にするとか慈悲の心というものは、私たちの文化の中にもしっかりとあったので、それをただ「女性性」という形で表現したというところではないかと思います。

村川：それがアメリカの女性の内にあって気づかれていない部分に光をあてたのでしょうか。

小田：びっくりしたのではないかと思います。すごく喜んでもらえました。ある意味で、今の日本の状況は、アメリカの1960年代の絶望的な状況にとても似ていると思います。そういう意味では、本当のスピリチュアリティのようなものが戻ってくる素晴らしい時ですね。

村川：ベトナム戦争や、今であればのように、社会が本当に大変な状態のときに、誰かに助けを求めるといよりは、自分の中の本当の、ポジティブな力が必要だったのですね。それを、小田さんは、女性の力として表現していったのですね。

小田：戦争ですから、男性的な、男性社会が崩壊していく中で、何がそのカウンターバランスになるかと言えば、「育む力」とか、「命」などと思うわけです。だから、それをすごく求めたのだと思います。

村川：日本ではそれがまさに今必要とされていることですよ。これまでの日本はずっと、コンクリートの城壁や原発などで社会を作ってきました。

小田：それがもうすごく滅茶苦茶になっているのを見せられたときに、どこへ戻るのか、自分の戻る場所のようなものを探す必要があると思います。

村川：それが、自分たち自身の中にあるポジティブな力であり、それを引き出す、人と人とのつながり、自然とのつながりということですね。

小田：絵ですから、言葉ではなく直接的に訴えかけますよね。だから、そうしたことができたのかもしれない。それに、私だけでなくジョアン・ハリファックスさんや何人かの女性たちが自分たちのそういうものを探そうとしていたので、そういう仲間たちに学ばせてもらったのもすごく大きいです。先日『ターニング・ホイール (Turning Wheel)』²⁾ 誌のために、スー・ムーン (Susan Moon)³⁾ がインタビューをしてくれましたが、その中でも、そういった女性たちが助け合った力ということについて話しました。最初は1970年代の終わり頃で、カタコンベ (地下墓所) の中にいるキリスト教徒のように男たちから隠れるようにして女同士で禅について、「うたれるのはおかしいよね。警策使うのはおかしいよね。あれは暴力だ」とか話をするとところから始まったのです。女の人たちが、「禅の男性性っていうのは、あれは本当に仏教なのか、それとも侍なのだろうか」という問いかけをしたりして、結局警策の代わりにマッサージにさせ、打たせないのです。そうしたことをたくさんやりました。それが5年くらい続いて、だんだん、特に私がいたサンフラン

シスコの仏教界では、在家の修行が多くなって、もっともっと柔らかくなっていきました。朝3時半起きということなどなくなりました。

伝統を現代に活かすために必要な「実感」

村川：そうした伝統的なあり方を変えていくということが、後の社会的活動にもつながっていったのだと思います。1960年代、1970年代に女神を描くことから、そうした社会活動に至るまでの間の仏教の実践について、もう少しお聞かせください。

小田：仏教というのは、修行ですよね。自分たちがどういうふうに変われるかというのを、体系的に教えてきたのが仏教だと思います。日本人の場合は、その前に神道があるわけです。神様と自分は一つだとか、そういうことは感覚的にわかるのですが、神道の修行は体系的にそれを教えるということとはほとんどありません。私の場合はそれを教えてくれたのが禅の修行だったと思います。

村川：自分が体系的に変わるという目的のなかで、「警策はおかしいよね」とか、伝統でやっていることをそのまま受け入れるのではなくて、そこで起きていることを自分たちなりに変えていったのですね。

小田：自分たちのものとして咀嚼していくとか、変えていくということですね。日本であれば、警策をマッサージに変えるというのは難しいですよ。しかし、それはアメリカであれば可能なのです。アメリカでは仏教は新しいですから、そういうことはずいぶんやりました。

村川：仏教を受け入れながら、修行のあり方などについて、自分たちが咀嚼して、どうい

やり方が一番いいのかというのを作っていこうとする。そうした動きはまさに今、日本の中で一番求められていることだと思います。先ほどはカタコンベの中にいるようだとも言われていましたが、そうした動きはどのように生まれてきたのでしょうか。

小田：坐禅をして、それによって自分が変わることの素晴らしさをまず実感しました。それがあったからこそ、どうやれば伝統的な方法が自分たちにとってうまく機能するのかを実感しながら確かめていくことができました。自分にとって本当にわかるもの、納得できるものでなければ、具合が悪いですよ。だから、そういうものに作り変えるということをしたのです。

村川：坐禅をして色々な体験をしていくなかで仏教の教えを実感として確かめながら、そのための修行をやっていくときに起きてくる疑問に対して真摯に向かい合う。

小田：応えていくといいますかね。そういうことは、なかなか日本ではできませんよね。もちろん私も、そうやって変えていくことが必ずしもよいことだとは思いませんし、そればかりやっていてはよくないと思います。自分をそういう一つの苦行（タパス）というか、修行というものに入れなくては、自我というものがとれないわけです。私としてもそれは分かるのですが、やはり両方バランスをとるといのはすごく必要だと思います。

村川：今言われたように、枠にはめないと、自我が見えてきません。その一方で、システムや伝統のもっている自我のようなものもあるわけで、それをどう変えていくかというのは難しいが大切ですね。

小田：その判断は難しいですね。

村川：実際にアメリカ仏教はそれを何十年かやってきて、今様々な動きを見せています。もちろん何百年の歴史の中で色々できていくにしても、少なくともそれをある方向としてずっと育んできて、社会の色々なところで影響を与えているところまでできていると感じます。たとえば先に言われたカタコンベのように、何人かの女性の中でそういうことをやっていったときに、それをだんだんと広げていくだけの力というものがあったわけですね。どのようにしてそれが可能になったのでしょうか。

小田：仏教で、自分がすごく変わる、修行をしたことで変わるという、その経験はすごいですし、真剣にやれば、色々なことが変わるわけです。やはりそれだったと思います。一週間、接心を行うというのは大変ですが、それを普通の人たちがやったわけです。日本でもどんどんそういう動きになってくると思いますし、私たちの文化の中にはそれがあるので、日本人はもっと楽にやることができると思います。やはり、サンガのように、そこに入っていけるという状況がきちんとあったことに対して、やってみると大変だけれども、出たときに、「有り難いなあ」というものすごい感謝の気持ちがずっとありました。だから、長きにわたる苦しい状況の中で不満も多々あるのですが、それでも、修行の美しさ、法の美しさのようなものにすごく打たれたから続けられたのだと思います。

村川：有り難さとか、法（ダルマ）のすばらしさということを実感していくのですね。

小田：それがなければ意味がないですね。やはり、アメリカの人はみんな、それだけ自分で努力しているのです。そのようなことを、私

は日本では見ることはできませんでした。下手だろうと何だろうと、やはり一週間座り続けることの辛さの中から得た美しさといったものに対して、みんなものすごく動かされたのだと思います。それがアメリカ仏教の強さになっていきました。

村川：そういうアメリカの仏教の強さというのが、実践の中で起きてくる批判というか、何か変えていこうという力の原点にあるわけですね。

小田：そうですね。だから、変えていこうという動機には、修行で得られる体験が美しいから、たくさんの人ができるようにどんな人にも出来るようにしてあげようという気持ちがあるのです。そうした思いでそれぞれのグループが、それぞれ違う形に変えていったのです。

村川：そこには仏教の原点である慈悲の心というか、その素晴らしさ、ダルマの素晴らしさをより多くの人たちに体験してもらおう、実感してもらおうという強いモチベーションがあったわけですね。

小田：それを実感させてもらえたということが、絵描きである自分にとって一番大きな力になっていると思います。

村川：そこはすごく、今の日本にとっては大きな、大変な問題ですね。

小田：すごく大変な問題です。だから、外国からきたチベットの仏教とか、ヴィパッサナーとかにひかれるわけです。なぜなら、古いものが、それだけの美しさというのをださないし、どうしても抹香臭いと思うわけです。

村川：若い人たち、特に教団の外から仏教に入ってきた人たちの中には、自分たちなりの仏教を創っていきこうという動きは出てきていると思います。それが、なかなかきちんとした横のつながりになっていないので、この学会でも何かできればとは思っています。

小田：四国の瑞応寺に檜崎通元老師⁴⁾という方がいて、片桐大忍老師ととても親しい人なのですが、そこは本当に、曹洞宗の真髓を教えてください。そこでいつも大切なものを頂くので、「あたしにもこれができたらどれだけいいだろう」と思うのですが、私にはこうしたやり方はできないとも思います。このような修行のやり方は、私のタイプではないと思うのです。私がしようと思ったのは超宗派ですし、仏教とか、今私はどちらかと言えばヒンドゥー教なわけですが、ヒンドゥー教とか、道教とか、そういうものを越えたスピリチュアリティというものに一番惹かれます。だから、それぞれ、曹洞宗をやりたい人はやればいいですし、本当にできる人は檜崎老師の所に行ってやってほしいと思います。けれども、ある種のメンタリティとか、精神性というのが、それにちょうどあっている人にしかできないと思います。

だから、私としては、どんな方法であっても、日本の昔の人が自然と本当に一つのものだと思っていた、そこに行ければいいのではないかと思うわけです。それを、私としては、若い人にも伝えたいですね。仏教とか何とかそういうものも越えたスピリチュアリティです。なぜなら、本当はそうした区別はないわけですから。自然の中で人間が生きていかないといけない、そうしたスピリチュアリティにいきたいわけです。

村川：トランスパーソナルというのは、そこを一生懸命目指してきたと思います。

小田：そういう意味ではトランスパーソナルなところにいけばいいと思います。それが文明になっていけば、私たちは恐れることは何も無いと思います。江戸時代の文化の中には、トランスパーソナルなものがものすごくありました。仏教と言わず、「江戸のしぐさ」とか、そういう違う言葉で、やらなくてはならないことを教えました。そういうのが、人間的でいいなと今の私には思えます。

仏教の修行から社会活動へ —Engaged Buddhismの実践

村川：1970年代の女性のスピリチュアリティ運動から1980年代は仏教の修行、そして1990年代からはプルトニウム・フリー・フューチャー(Plutonium Free Future)⁵⁾やINOCHI⁶⁾あるいはハワイのジンジャーヒル農場での社会活動へと展開されました。それらはどういうきっかけで始められたのですか。

小田：1992年に、日本がプルトニウムの政策を進めようとしたとき、高木仁三郎⁷⁾という非常なヒューマニストがやっている運動にもものすごく感動して、私はこれを手伝おうと思いました。命を大切にしない最悪なものがプルトニウムです。そのシンボルのように思いました。絶対にこんなものを人間と一緒にしてはいけないということから始まった運動です。私はその前に、画家として活躍させてもらって、ずっとその恩恵も被ってきたので、今度は何か私と同じような気持を持つ人と一緒に未来の事を考えて、プルトニウムのような大変なものをなくそう、という気持ちになりました。

先日、不思議なことに、仁三郎さんの妹さんと、円山公園で3.11のデモをしました。すごかったです。京都ジャーナルのアリス・ウィルソンという女性が、私にインタビューしてきたのですが、その彼女が義理の母だといって紹介

してくれたのが仁三郎さんの妹さんでした。普段ならデモはなかなか人が集まらず、400人くらい集まれば嬉しいというところが、2万人くらい円山公園に集まったと思います。とにかくすごくて、みんなダンスして楽しくそういうことをしているときに、高木さんの妹といるというのは、何か不思議な気持ちになりました。

それと、私が一番好きな人に大田垣蓮月⁸⁾という尼僧で女流歌人がいます。彼女はこれも私の大好きな富岡鉄斎の育て親のような役をした人です。彼女は石田梅岩の心学を学んで、橋を作ったり、洪水があるとおにぎりを作って振舞ったり、そういうことにお金を使いました。私は50歳になるまで色々な人から恩恵を受けてきたので、蓮月のように社会に何か返さなくては、というのがありました。プルトニウムの運動をする前に、種の問題がすごくあって、環境問題が大きくなってきたときに、環境のことをやろうかと思ったのですが、とにかくプルトニウムを止めないと、先のこともないですし、一番大変な問題だということに気がついて、そのことを始めました。私だけが始めたわけではなくて、棚橋一晃⁹⁾さんや、室謙二¹⁰⁾さん、風砂子・デアンジェリス¹¹⁾さん、中野民夫¹²⁾・ようこ¹³⁾夫妻といったアメリカにいて日本の色々なものに煩わないでいい人たちと一緒に、日本とアメリカの架け橋、外国との架け橋となって何かしようという、そういう気持ちで始めました。いのちの大切なことを守ろうと言って、私たちの財団は「INOCHI」という非営利団体にして、「プルトニウム・フリー・フューチャー」をその一つのプロジェクトにしたわけです。

村川：社会との関わりの中で、命を育む力というのを訴えるだけではなくて、実際の活動をして実現していこうとされたのですね。それからハワイに移られて、ジンジャーヒル農場をつく

られましたよね。

小田：ハワイに移ったのは2000年です。1990年代はずっと「INOCHI」をやって、1999年に「20世紀最後の平和会議」というのに出て、それを機にして終わりにしました。地震が多い国である日本に原発があるのはとても危ないということを言い続けたのですが、全然聞いてもらえませんでした。今考えてみれば、当然のことだったと思います。実際に地震になってこんなにひどいことになっても、全然大丈夫だと言っている人たちなのですから、相手にしても無駄だったのです。そういうことにくたびれて、もう大変なことになるに決まっていると思いました。メルトダウンなどがあったときに、誰かが自然と一つになって生きていくことを実践して示さなくてはいけないので、何かそういうときのモデルケースになればいいなと思って、農場をはじめました。5年くらいでできると思っていたのですが、11年かかりました。

村川：そこでは、どのようなモデルケースを作ろうとされたのですか。

小田：教育ですね。若い人に、自然と生きることの大切さというか、本当に一つであるということ、自然と自分との境目が無いのだということを理解してもらったり、食べるものを自分でつくって、自分の健康を守ったりするというようなことを教えることを実践的にやりました。結局、11年の間に全部で200人くらいになったと思うのですが、外国の人もたくさん来ましたし、日本人の若い人も来しました。そういう人たちがそれぞれの場所に戻っていき、そのうちにだんだん女神の修行、「女神塾」という塾にして、女性性というものを大切にする、命はぐくむ力、愛する力、仲良く、みんな一緒に生きていくという、サンガ、コミュニティをつく

る、そのような経験をしてもらうことをずっとやってきました。

A prayer for new birth of Japan

村川：それを今度は日本でやっていかれるのですね。

小田：私がやるのではなく、誰か若い人たちがやるほうがいいのです。おそらく、私が日本でやっていこうというのではなくて、皆がやっていくようになると思います。これから先わたしは、皆がポジティブに前に進むための触媒のようになることができればいいと思いますね。分散型のいのちを大切に、アマテラス、太陽神、太陽を母親と思うような文化に戻ることができるようになるために、そういうことを思っている人たちと集まって、皆が助け合いのネットワークをつくる手伝いです。手伝いくらいしか、私にはできません。若い人がそういう方向に向くようにお手伝いすることです。そのために私が少し知っていることで役に立つことがあれば、それを皆と共有することができたらと思います。

村川：冒頭では、日本の江戸文化がもっていたものが、アメリカの女性運動のビジョンとして受け入れられたということを伺いました。今の日本にとって非常に大事なものを、自分たちがもっているもの、自分たちがもっているポジティブな力に対して、そこに力があるのだということにさえ光をあてれば、自然にそれが開いていくのですね。それを覆い隠しているものというか、うまく蓋をはずしていければと思います。というか、そういうものはすでに311ではずされてしまったようにも思います。

小田：何よりも戻るところがある。多くの人

が、私達には戻るところがあるのだと言っているのを聞いています。だから、日本の強さは、戻るところがあるということですし、忘れていない人がまだたくさんいらっしゃるということです。

村川：それは非常に大きなメッセージですね。トランスパーソナルという、アメリカやヨーロッパといった西洋文明の中から出てきた考え方が、今の日本にとってなぜ必要かという、日本の戻るところをある種示してくれるからだと思うのです。戻るところがあるというメッセージが、先ほど仰ったようにある触媒として働く。でも、何にどこに戻るかというのは、自分たちで見つけていくしかないのだと思います。

小田：戻るものがあるというのは、そのことをもう一度思い直すということです。あまりにも多くの人や、西洋人が言ったことがいいと思っていますが、日本はすごいものをもっている、価値観をそこに持っていくということです。私たちのDNAにすでに入っていると思います。『スイッチ・オンの生き方』の著者、村上和雄先生¹⁴⁾のドキュメンタリー映画が一部で評判になっています。同じ事を思っているのは私だけではないですし、色々な人表現してきているのだと思います。

私には、「新生」という言葉がビジョンとしてできました。まず英語で、“new birth of Japan”、“A prayer for new birth of Japan”というものでした。何もないものからうまれてはきません。だから、私たちの中にある、DNAがもっているものに戻るといふか、そこに価値観を向け直すことの大切さをすごく思います。

村川：私にとっては、それは身体です。「からだ」というのはまさにDNAでもあり、自分

の中に、江戸の文化も残っています。今の私たちのからだをしっかりと掘り下げていけばいくほど深く染みこんだ大事なものがみつかると思います。最初に仰ったように、小田さんが女神を描き始めた1970年代に、自分の中に染み込んでいた江戸の文化や仏教文化を表現していかれました。まさにそれを、日本人一人ひとりが行うということですね。

小田：一番好きなものや、自分がそこにひかれるものに戻るといことです。榎崎通元老師は、そのひかれるものが西洋ならクリームパンだが、私たちはやはりアンパンの文化なので、アンパンに戻れといのです。私たちはあまりにも西洋化してしまいましたよね。必ずしも全ての人のDNAにあるのかどうかは分かりませんが、素晴らしい若い人たちが出てきているということは確かです。

村川：今仰ったように、若い人たちが、自分たちが好むものや、いいなと思うものに戻っていくといことですね。だから、どこかに正解があってそれを学ばないといけないといのではなくて、自分たちが本当にいいと思ふもの、そこに向かっていけばいくほど、だんだんとそれが掘り下げられていって深くなっていく。そこから何か湧き上がってくるように、井戸掘りをしないといけないのだと思います。

今日はとても大事なお話を有難うございました。

2012年3月12日 京都烏丸にて
インタビュー・構成：村川治彦

注

- 1) Women's Liberationの略。1970年代に始まった女性解放運動。性による社会的役割分担に反対して女性の社会進出を主張し、男女平等社会の推進に貢献した。
- 2) あらゆる生命の相互依存性という観点から社会的活動を仏教の実践として推進するアメリカの仏教団体The Buddhist Peace Fellowshipが発行する雑誌。
- 3) Turning Wheel Magazineの元編集長。The Life and Letters of Tofu Roshi等の著作がある。
- 4) 1926年生まれ。佛國山瑞應寺専門僧堂堂長・師家。
- 5) Plutonium Free Future (PFF)は1992年日本のプルトニウム政策への懸念から、米国と日本の一般市民が協力して政策の変更を求めるために設立した団体。後に、INOCHIのプロジェクトとして継承される。
- 6) 小田まゆみ、棚橋一晃、風砂子・デアンジェリス、クレア・グリーンフィルダー、ジョアンナ・メーシーらが設立した米国非営利団体。PFFをはじめ様々な国際的環境活動や平和運動プロジェクトの母体となっている。<http://inochi.us/index.html>
- 7) 核化学者(1938年-2000年)。1975年政府や企業から独立した立場から、原子力政策の調査・研究・提言を行う組織として「原子力資料情報室」を設立。著書に『原発事故はなぜくりかえすのか』(岩波新書)他多数。『高木仁三郎著作集』全12巻(七つ森書館)
- 8) 江戸時代後期(1791年-1875年)の尼僧・歌人・陶芸家。
- 9) 米国在住の画家・書道家・平和活動家。道元の正法眼蔵の『Treasury of the True Dharma Eye』(Shambhala出版)英訳者、ティック・ナット・ハンの『仏の教え ピーピング・ピース』(中公文庫)の訳者でもある。
- 10) べ平連活動家として脱走兵逃亡を手助けしFBIから脱まれながらも米国籍を取得。元『思想の科学』編集長。著書に『非アメリカを生きる-〈複数文化〉の国で』(岩波新書)等多数。
- 11) 米国在住の環境活動家。本田雅和との共著『環境レイシズム-アメリカ「がん回廊」に行く』。チョギヤム・トゥルンバ著『タントラへの道-精神の物質主義を断ち切って』の翻訳者でもある。
- 12) 博報堂を退職し、組織変革学研究のためC I I Sに留学。現在同志社大学大学院教授。著書に『ワークショップ』(岩波新書)等。
- 13) 女性のこころとからだを育むワークショップの企画等を行うアルテミス・ネットワーク(現・アルテミス)の設立者。<http://artemis-moon.jp>
- 14) 分子生物学者。筑波大学名誉教授。遺伝子工学で世界をリードする研究者の1人。著書に『スイッチ・オンの生き方-遺伝子が目覚めれば、人生が変わる』(致知出版社)他多数。